展望台にて

放射朗

その公園でたびたびホモ狩りが行われてる事を、僕はあるホームページで知った。
被害者の男が、その模様を告白していたのだけど、僕はそれにとても惹かれるものを感じた。イニシャルでぼかして書いてあったが、付近の描写から推測して探し出し、今夜やってきたのだった。
ここに来るまでの間、中腹の道から見下ろす町並みは、ブルーのインクを薄く塗った単色の絵に時折赤や黄色の絵の具が間違って落とされたみたいに、そしてその間違いのインクがどんどん増えていくみたいに見えていた。
薄かったブルーが、公園に着く寸前には濃紺に変わっていた。
秋の夕暮れだ。蚊に悩まされる夏場と違って、公園で『発展』するには最適な季節になろうとしている。

低い山の中腹にあるその公園は、夜景のきれいな公園だった。車十台くらいの駐車スペースに原付スクーターをとめる。
奥の方にバンが一台停めてあった。フィルムをはられた車の中は、それでなくても薄暗い中、全く窺い知る事ができない。
怯えが湧いてくるのを堪え、なるべくそのバンを見ないようにして公園の方に降りていく。
レンガの階段を下りて芝生の伸びた園内に入る。手前には子供用の遊具が幾つか並び、先の方を上っていくと頂上に展望台があった。
時折風が木の枝をゆする音以外、周囲は静まり返っていた。
見回したところ誰もいないようだった。ホモ狩りを恐れて、その傾向のある男達も寄り付かなくなったのかもしれない。

今日は空振りだったかな。しかし、そう簡単に会えるとは思っていないから、こっちも別にがっかりはしない。
その事件があった場所に立ってみたかっただけなんだから。とりあえず今日のところは。
手入れの行き届いていない芝生は、ふかふかし過ぎて歩きにくかった。
ゆっくりと奥の展望台に上っていく。さっき陰になって見えなかったベンチのあたりにも誰もいない。この芝生の坂は、ダンボール板で滑り降りる、子供たちの小さな草スキー場だ。
昼間子供を乗せて何度も滑り降りて、擦り切れたダンボールがいくつも落ちていた。
最初はなだらかだった坂が、頂上に近づくにつれて急な傾斜になってきて、もう少しで息が切れそうだというときに、やっと展望台まで上がってこれた。
展望台の階段に足をかけたところで、くぐもった声を聞いた。
ううん、……ああ、と、言葉にならない声は上のほうから漏れてくる。
見上げるけど、階段の上の状況は陰になっていてさっぱり見えない。
うめき声は女の声だった。ホモのカップルじゃなさそうだ。
男女のカップルが上で楽しんでるのに違いない。

男女のエッチな場面を覗くために来たわけじゃないから引き返そうか迷ったが、つい好奇心に負けて足音を立てないようにその階段を上っていった。白いタイル張りの階段は街灯に照らされて青っぽく光って見えた。
背伸びすれば上が覗けそうな高さまで上がる。そこで身体を伏せてゆっくりずり上がり、覗いてみる。
まず目に入ったのは、大きな白いお饅頭の様な女のお尻だった。
こっちに突き出すようにしていた。
スカートは捲り上げられて、白い布切れのようなパンツは膝まで下げられてる。

弾力のある二本の太腿が揺れ、お尻の肉がふるえる。
女の尻の割れ目には黒くてごつい腕が張り付いていた。
その手が動くたびにクチュクチュとねちっこい音をあげ、女の感極まった声がそれに追随する。
座った男の股間に顔をうずめて、四つん這いになった女がフェラチオをしているのだった。突き出された彼女のお尻は月の光を浴びて青く光っている。汗なのか他の液体によるのかわからないが、じっとりと湿った肉球は触ればつるんと滑りそうだ。
谷間が男の手で見えないのが悔しい。その手の後ろの、すぼまった肛門とその下に深く割れた二匹のナメクジが形作る溝を見たいと僕の股間が切実な要求を突き上げてくる。
男の腕が激しく動き出す。女の中に入れている指をせわしなく出したり入れたりしている。周囲の静けさの中に、女のそこから溢れ出した液体の音が、ちゅるちゅると浮き上がり、リズムに乗ってあたりをさまよっている。
それを見たとたん僕のものも固くとんがって、ズボンのなかから飛び出そうとでもいうように生地を張り詰めて緊張を作る。
僕は右手でチャックを下げると、今にも暴れだしそうなじゃじゃ馬を取り出して、軽く左手で擦ってやった。
すっかりぬるぬるになった亀頭の縁を親指と人差し指で作った輪で握り、くっと引き絞るだけでも、あっという間に絶頂に行ってしまいそうだ。
「うう、今度はここに跨ってくれよ」
男の声が聞こえた。女は小さくうんと答えると、立ち上がり、膝にまとわりついていた布切れを脱ぎ捨てる。そして座った男の腰に、自分の股を近づけていった。
スカートも脱ぎ、女は薄手のトレーナー一枚で、下半身は裸になる。
格好からいってかなり若い女のようだった。ひょっとしたら女子高生かもしれない。男の方はもう少し年が上か。短髪と薄いティーシャツ越しに盛り上がった筋肉が体育の教師のようだ。女子高生と体育教師のカップルだ。

僕は勝手にそんな設定を作ると、ここまできたストーリーを想像し始める。
男に腰を抱かれた女の衣服が上にずれて、彼女の腰のくびれがあらわになった。
引き締まった腰に、後ろに突き出たお尻。見てるだけで頭の中が熱く煮えたぎってくるようだった。
この二人は学校では全く知らん振りしてるのだろうか。いや、そんな事はないはずだ。二人は近くの西岡高校の教師と生徒で、きっと体育の授業が終わった後、用具置き場で淫らな事をしてるのに違いない。
汗を吸った体操着をずりあげて、背中のブラのホックを外すと、手の中にちょっと小ぶりの湿った乳房がまろび出て来るのだ。
それを優しく揉みながら硬くなった乳首をくいっとひねってやる。
すると、うん、あ、駄目です。なんて甘い声をあげるのだ。
誇りっぽい用具置き場の昼下がりだ。窓から斜めに差し込んだ日光に、糸ぼこりがゆったり浮いている。薄い扉一枚外では、生徒達が次の授業へ向かってる。
マットにゆっくり転がる女の子に、教師はかぶさり、右手をしっとりとした柔らかなブルマーの中に入り込ませていくのだ。
かわいい顔に似合わず濃い陰毛を掻き分けて、完熟した果肉のようになった隙間に指を入れていくと、擦れ合うように閉じていた彼女の膝頭の力がふっと抜けて、教師の手で大きく広げられる。
え？　違うな。まだブルマーもパンツも脱いでなかった。
想像上のビデオテープを巻き戻してると、駐車場の方でエンジン音が聞こえてきた。振り返ってみるとヘッドライトを明々とともしたセダンが一台滑り込むところだった。
またカップルかな。みんなここであった事件の事を知らないのかな。
新聞やテレビのニュースで流れたわけでもないから、いくらネット上で有名でも、知らない人はたくさんいるのだろう。

高校教師と女子高生のカップル（僕の意識の中ではすでにそういうことになっている）に目を戻すと、いきなり体育教師と目が合った。
うっかりと頭一つ分伸び上がってしまったようだ。
驚いてのけぞる僕だったが、男の方が更に驚いてるようで、座位で結合している女子高生を慌てて下ろそうとしている。
「何よ。なに？」
せっかく気持ちいいところなのにと、女子高生の不満の声が上がった。
「ちょっと降りろよ。あんた、何見てんですか、あっち行ってくださいよ」
体育教師は案外気弱な奴かもしれない。腰の上でなおも出し入れしてる女子高生を抱えあげて横に下ろした後、僕に向かって言う言葉じりがふるえていた。
怒りにふるえてる感じはなかった。
「あっと、すいませんね。道に迷ってしまって」
僕はとぼけて、言いながらずんずんと階段を上った。
「きゃあ、何。あんた誰よ。変態！　覗きでしょう。痴漢！」
女子高生はやはりあどけない顔をしていた。街灯の光を受けてるから顔色は青白いが、目の大きい、唇の少し厚い子だった。
彼女はまだ濡れて湯気の立つ股間をトレーナーの裾で隠そうとするが、丈の短いトレーナーではとても隠し切れない。
やっとそれに気付いたのか、さっき脱ぎ捨てたパンツを探し出した。
体育教師は体育教師で、慌ててチャックを上げようとして挟んでしまったんだろう。ぎゃっと首をひねられた鶏みたいな悲鳴をあげていた。
「痴漢だなんて、失礼だねキミは。僕はこう見えても警察だよ。キミ達こんな所でそんな卑猥な格好をしちゃいけないんじゃないかな。公然わいせつ罪っていうの知らないのかな」
僕は瞬間的に今思いついた設定を台詞にのせて言って見た。
なかなかいいアイデアだ。

「え、すいませんすぐパンツ履きますから牢屋に入れないでください」
元々は素直な女子高生なんだろう、ぺこりとお辞儀をして再びパンツを探し始める。
「キミの探してる物はこれかな。さっき僕の頭の上に降ってきたんだけど」
まるで紐みたいな細い布切れを彼女の目の前で揺らせると、彼女は飛びつかんば
かりに引ったくってきた。
しかし指先がかすめたパンツはふわりと浮き上がって、風に流されて展望台の下に落ちていった。
「きゃあ、困るわ」
彼女は悲鳴をあげながら下半身裸で階段を駆け下りていった。
スカートくらいはけばいいのに。人間って慌てるとろくな事はないもんだ。
体育教師は挟んでいた物が何とか外れたみたいで、ほっと一息ついている。
「あんた、警察だなんて嘘言うなよ。さっきは道に迷ったなんて言ってたじゃないか」
さすがに男は女より冷静だな。鋭く僕の矛盾点をついてくる。
あの時は僕も動転していたんだよ。と白々しく言ってやると、そうですか、それじゃさようなら。と言って彼女のスカートを拾いもせずに階段を下りていく。
「ほら、忘れ物だよ」
台上からスカートを落としてやる。
拾い上げたパンツに足を通そうとしていた女子高生の頭にふわりとそのミニスカートは落ちていった。ふんだ、馬鹿と一つなじって、彼女らは草スキー場の坂を降りていった。
展望台の上で一人になった。
丸い月がかすんだ空にぼんやり浮いていた。今夜はホモ狩りにはあえなかったみたいだ。また来週でも来るとしよう。女暴走族がホ

モ狩り、という事件は僕の心をきゅんとつかんで興奮の渦にまきこんでしまった。
僕も女の不良に狩られてみたいとおもって、ここにやってきたのだった。でも僕はホモじゃないし、ホモがいないんじゃホモ狩りも現れるはずない。
一つ深呼吸して、展望台を降りる僕は、もちろん自分のスクーターがさっきの二人によってパンクさせられてるなんて思ってもいなかった。

展望台にて　　おわり